

第 18 回アジア競技大会および 2018 バクー世界柔道選手権大会を振り返って

増地克之*

Looking back at the 18th Asian Games and the World Judo Championships in Baku 2018

MASUCHI Katsuyuki*

1. はじめに

2018 年 8 月 29 日から 9 月 1 日までインドネシア・ジャカルタにおいて第 18 回アジア競技大会柔道競技（以下、アジア大会と略す）、さらに 9 月 20 日から 9 月 27 日までアゼルバイジャン・バクーにおいて 2018 世界柔道選手権大会（以下、世界選手権と略す）が行われた。両大会ともに男女 7 階級と 2020 年東京オリンピックで正式種目として採用される男女混合の団体戦（女子 57kg 級・70kg 級・70kg 超級、男子 73kg 級・90kg 級・90kg 超級の 6 人制）が実施された。参加国はアジア大会が 35 カ国 224 名（男子 131 名・女子 93 名）、世界選手権が 124 カ国 775 名（男子 478 名・女子 297 名）であった。日本選手団女子監督という立場で両大会を振り返り、約一年半後に迫った 2020 年東京オリンピックに向けての強化における課題・対策などについて述べる。

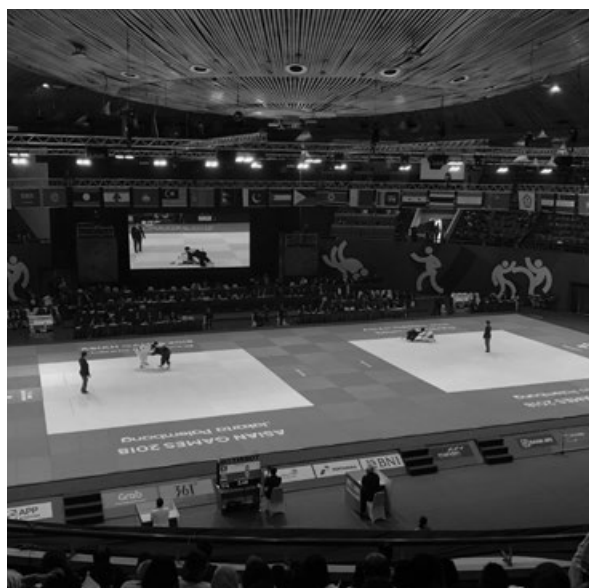


写真 1 アジア大会試合会場



写真 2 世界選手権試合会場

2. 選手選考

アジア大会および世界選手権の選手選考については、公益財団法人全日本柔道連盟（以下、全柔連と略す）が定めた強化システムに関する内規¹⁾に沿って、4 月の最終選考会後に開催される強化委員会で最終決定された。選考基準は、前年のオリンピックまたは世界選手権から国内大会までの国内外の主要大会が対象大会となり最終順位のみでなく、大会のレベル、組み合わせ、対戦相手、技の判定、負傷、その他最終結果に影響した可能性ある要素など総合的に判断して代表選手を選考することとなっている。この強化システムの目的は、日本を代表し金メダルを獲得できる可能性のある選手を選考するというのが大前提であり、全柔連の国際強化の目的であるオリンピック競技大会において全階級メダル、そしてその内、複数の金メダルを獲得することにつなげていくことにある。今回のアジア大会と世界選手権に本来であれば日本のトップ選手を派遣し、金メダル獲得を目指すべきところであるが、アジア大会と世界選手権の日程が近いことから各階級の 1 番手を世界選手権（2 人枠の階級については 2 番手も含める）、2・3 番手をアジア大会にそれぞれ派遣した。

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

3. 強化スケジュール

4月の最終選考会が終わってから大会までの約6ヶ月間、国内外合わせて7回の合宿を実施した。2018年1月から一部ルールが変更され、合せ技「一本」(合わせ技とは「技あり」2つのこと)が昨年の廃止から一転して復活となり、これをどう試合に活かしていくか最大の課題として合宿で取り組んだ。具体的には、2017年1月に「技あり」と「有効」が「技あり」に統一され、それまでの「有効」レベルの技も「技あり」となったものの、昨年までは3つも4つも「技あり」を奪ったとしても「一本」を取らない限り試合は終わらなかった。しかし今回のルール改正により「有効」レベルの技を2つ獲得するだけで「一本」になってしまうことから、ディフェンス面の強化をポイントの一つとして取り組んだ。攻撃面に関しては、確実に「一本」を獲得できるよう立技から寝技への移行を昨年に引き続き強化を図った。また、ゴールデンスコア(延長戦)における勝敗決定方法がスコア(「技あり」か「一本」)または「反則負け」(直接的または「指導」の累積による)になり、試合時間の長時間化が予想された。そこで持久力向上を目的に女子ラグビー日本代表との合同トレーニングを行い、柔道のトレーニング方法にはない体力強化方法を学ぶことも取り入れた。



写真3 ラグビーナショナルチームとの練習風景

4. アジア大会

アジア大会においては個人と団体に金メダル6個以上、出場階級全てでメダル獲得を目標に掲げ大会に臨んだ。結果は、7階級全てにおいて決勝戦に進出し、7階級中6階級で優勝を収め日本チームの層の厚さを示すことができた(表1)。このアジア大会好成績の要因としては、各選手が世界選手権の日本代表に選ばれなかった悔しさにより発奮したことが考えられる。特に次世代を担う選手が活躍し、今後に向けても明るい材料であった。しかし、6個

の金メダルを獲得したとはいえ、各国の本大会に賭ける意気込みは強く、どの試合も紙一重であった。中でも、現在全日本において我々が取り組んでいる寝技と足技を活かすことができる選手が、安定した試合内容で勝利することができたことは収穫であった。今後は、寝技のバリエーションをさらに磨いて行くことが2020年に向けて必要である。

表1 第18回アジア競技大会柔道競技日本選手団の競技結果

階級	選手名	競技成績
48kg	近藤 亜美	2位
52kg	角田 夏実	優勝
57kg	玉置 桃	優勝
63kg	鍋倉 那美	優勝
70kg	新添 左季	優勝
78kg	佐藤 瑠香	優勝
78kg超	素根 輝	優勝
男女混合団体		優勝



写真4 アジア大会集合写真

5. 世界選手権

世界選手権においては個人と団体に金メダル4個以上、出場階級全てでメダル獲得を目標に掲げ大会に臨んだ。各国ともに2020年東京オリンピックに向け本格的に強化を進めており、昨年以上に厳しい戦いが予想された。その中、表2に示したように日本女子選手団は我々の予想を上回る個人戦では金メダル5個を含む出場選手9名全員メダルを獲得することができた。その一番の要因は、4月に代表が決まってから9月の本番まで順調に強化を進めることができたからだと考える。特に代表選手には世界選手権前に国際大会に出場させ課題を明確にさせること、そしてその後の合宿で課題克服に向けて選手、コーチ、所属が一体となり取り組むことができた。また、国際大会でポイントを獲得し世界ランキングベスト8以上に与えられる世界選手権でのシード権を代表9名中8名が獲得できたことで、早い段階で強豪選手と対戦することなくトーナメントを

勝ち上がったことも非常に大きかった。そして、何よりも世界選手権に臨む選手たちの心技体の充実さが、素晴らしいパフォーマンスにつながったといえる。



写真5 世界選手権女子メダリストを囲んで

5. 2020年東京オリンピックに向けて

JOC強化本部長である山下泰裕氏が2020年東京オリンピックでは日本選手団全体で金メダル30個獲得を目指すことを表明された。これまで日本の過去最多の金メダル数は1964年東京大会と2004年アテネ大会で獲得した16個という数字からみても簡単にクリアできる数字ではない。その中でオリンピック開会式の翌日からスタートする柔道で金メダルをいくつ獲得できるかが目標達成に向け非常に重要であると考えられる。その上で、次の3つの課題を紹介したい。

1) オリンピックまでの準備期間

現在のところ柔道のオリンピックの代表選考日程は、4月の第1週に開催される全日本選抜体重別選手権大会で最重量級（男子は100kg超級、女子は78kg超級）を除く6階級が決定し、女子は2週間

後の皇后杯全日本柔道女子選手権大会、男子は4月29日の天皇杯全日本選手権大会で最重量級の代表が決定することになっている。2020年東京オリンピック柔道競技の開幕は7月25日であることから、代表選手が決定してから試合当日までの準備期間は約3ヶ月間しかないのが現状である。特に代表決定まで熾烈な国内争いをしている選手達にとって、この3ヶ月間はオリンピックを戦う戦闘モードへの切り替えや、対外国人対策をするための十分な準備期間であるとは言えない。全柔連は、2019年の世界選手権までは内定システム（世界選手権優勝者が同年11月に開催されるグランドスラム大阪大会を優勝した場合、次年度の世界代表に内定）を導入しているが、東京オリンピックについては未だ方向性は決まっていない。選手の準備期間を考えた場合、2020年東京オリンピックについても内定システムを取り入れることも一考であろう。

2) 地の利を生かす

2020年東京オリンピックは言うまでもなく日本での開催であり、地の利を生かさぬ手はないと考える。会場となる日本武道館は2020年6月を目処に本館改修が終わる予定であるが、試合本番までの数週間間に合同練習を実施するなど、できるだけ会場の雰囲気を知ることによって選手達にとってはプラスに作用すると考える。また、日本武道館周辺での日本選手団専用の練習会場や休憩場所の確保など環境面の整備も急務であると考えられる。

3) メディア対策

国内で様々な国際大会が開催されると、その都度選手達への注目が集まるが、この2020年東京オリンピックはそれらと比較にならないくらいマスコミ報道が過熱することが予想される。これまでの傾向をみると、メディアが選手そのものを作り上げる

表2 2018世界柔道選手権大会日本選手団の競技結果

階級	選手名	競技成績	世界選手権時のシード
48kg	渡名喜 風南	2位	第4シード
52kg	阿部 詩	優勝	第4シード
52kg	志々目 愛	2位	第7シード
57kg	芳田 司	優勝	第2シード
63kg	田代 未来	2位	第3シード
70kg	新井 千鶴	優勝	第5シード
70kg	大野 陽子	3位	シードなし
78kg	濱田 尚里	優勝	第7シード
78kg超	朝比奈 沙羅	優勝	第3シード
男女混合団体		優勝	第1シード



写真6 世界選手権全日本チーム集合写真

行為や選手の言葉を全く異なる表現として伝える行為など年々エスカレートしているように感じる。選手達がメディアから取材を受ける際、過度なプレッシャーを感じないよう、専門家を招聘しメディア目線での言動などを知ることも重要である。

6. おわりに

今年の両大会の成績を見ると2020年東京オリンピックに向けて、ここまでは順調に強化が進んでいるといえる。しかし、2020年東京オリンピックまでの約1年半の間に状況は一変する可能性は十分に考えられる。そのような状況に対応できるだけの万全の準備をしていくことが、メダル獲得に必要な不可欠であると考えられる。2019年には、9年ぶりに東京で

世界選手権が開催される(8月25日から9月1日)。2019年・2020年の大舞台で日本代表選手が輝けるよう、選手、コーチ、スタッフ一丸となって強化に取り組んでいきたい。

最後に全日本強化にご理解を賜り、筑波大学体育系の関係者に心から感謝を申し上げ報告とさせていただきます。

引用文献

- 1) 「公益財団法人全日本柔道連盟」ホームページ
全日本柔道連盟強化システムに関する内規.
http://www.judo.or.jp/wpcontent/uploads/2015/07/kyouka_system20170313.pdf